

年間第23主日

すべてのいのちを守るための月間

福音朗読 マルコ 7・31-37

2024.9.8 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

教会の信仰では、わたしたちはイエス様のことを「まことの神であり、まことの人である」というふうに信じています。神様というだけじゃないんです。まことの人間——その神様がわたしたちの中に来られて、まことの人間としてこの地上の生涯を生きられたということを知っているわけです。

信仰宣言の中では——わたしたちはこの9時半のミサでは使徒信条を歌いますので短くなってますけども、頭を下げる部分っていうのは「おとめマリアから生まれ」っていう部分で頭を下げますけど、ニケア・コンスタンチノーブル信条でしたら「おとめマリアよりからだを受け、人となりました」っていう、その部分が信仰宣言の中心であって、そこが大事だから頭を下げましょうっていうふうに一応なってるんです——一所懸命歌ってるとつい頭を下げるのを忘れちゃうんですけど、典礼の動作というのは飾りじゃないんです。

前置きがくどいんですが、じゃあ「人となられた」ってどういうことかと言えば、ご自分の為すべきことを初めから全部分かっていて、そのプログラムに従って人生を送られたのではない、ということです。むしろ、一つひとつ神様との対話のうちに、祈りのうちに、あるいは周りの人から学びながら、出来事を通して体験しながら、何が大切で、ご自分の使命がなんであるのかというのを一つひとつはつきり見出して、そしてそれに従って生きられたということです。初めから全てをご存知ではない。すべてをご存知の神様。しかし、それを一旦脇に置いて、わたしたちと同じように、一つひとつを体験の中で見出して歩まれたということが、人となられたことの一つの大きな点でしょう。——人間ってそういうものですね。自分がすべきことを初めから 100 パーセント分かって、ただプログラムに従って生きているわけではない。それが人間の本質で、イエス様もそれを受け取られたと言っていると思います。

今日の福音では、イエス様が耳が聞こえず舌が回らない人に触れられて癒されたという出来事が語られていますけれども、これは福音書の中では最初に「ティルス地方を去り、シドンを経てデカポリス地方のガリラヤ湖畔」（マルコ 8・31）っていう、異邦人——当時の、神の民に属さないイスラエルの人々ではない人々——が住んでいる地方での出来事で、そのイスラエルの民に属さない人を癒されたっていう出来事が出て来るんです。でもそれは、このマルコの福音

書では、その直前の箇所はまた同じように異邦人の地であり、ティルス¹の地方において異邦人の女性が自分の娘が病気であることをイエス様に訴えて、癒していただくように願った。その出来事がこの今日の読まれた福音の直前に出て来ますけど、この時に最初はイエス様は「自分はイスラエルの民にだけ遣わされているんだ」って言って、その願いを取り合おうとされなかったわけです。でも、その女性との対話を通して、神様の恵みが昔からのイスラエルの民の子孫だけではなくて、すべての人に及ぶというふうにイエス様の考えが変わったと言いましょうか、よりはっきり神様のみこころが分かったというわけです。

でも、その時の出来事は、娘はその場にいなかったのだから、「あなたの信じるようになるように」って、お家で伏せていた娘がその時刻に癒されたって話になりますけども、今日は一步進んで、イエス様がその異邦の相手に直接出会う、そして体を触れられたって言う——つまり、その時には最早、「自分はイスラエルの民にしか遣わされていない」とかというようなやり取りはないわけです。「この人を癒してあげてください」と言って願われたのは、頭に手を置く、でもそれ以上のことをイエス様はされています。耳に指を入れ、そして唾を舌につけるって非常に深い接触を表わしています。

そのようにして、初めから神の民としてみことばを与えられていなかった人々もイエス様に出会ってより深くつながっていくという神様のみこころがイエス様の行動の中に段階的に表されていっているということが出来るわけです。

耳を開く——その業を行ったイエス様ご自身がこの人々の声に、そして他の人々を通してご自分に向けられる神様の声に耳を傾ける方であった。だからこそ他の人々の耳を開き、そしてその舌に唾を——唾って言うのはイエス様の口から出ると言うのは、みことばのことです——みことばを与えることが出来るようになるんです。

一方通行で、「とにかくわたしの話を聞いてください」って言うようなところに相手への本当の意味での福音宣教はあり得ない。むしろ、イエス様が周りの人に耳を傾ける方であるからこそ相手に伝わっていくということを、聖書はずっと続けて読んで行くとだんだん明らかになっていくんだと思います。

わたしたちもそれぞれの中で、イエス様の恵みに触れていただいたと信じる者同士が、互いに耳を傾け合うことを通して、相応しくみことばを語る事ができますように。——みことばを語るって言うのは、何か聖書の言葉を暗記して、それを引用するとか、教えてあげるとかいうことではない。みことばの本質は神様の愛です——その愛が自分の中から出るように、つまりは語る言葉だけではない、一人ひとりの心から出て来る行動ということになると思います。

互いに耳を傾けるって言うのは本当に難しいことです。耳を傾けているようであっても、会話の中で次に自分が何を話そうかなって考えてたり、あるいは、ずうっと相手に耳を傾けていたら相手が調子に乗ってずうっとしゃべり続けるんじゃないかという、そういう不安とか、ありますよね。そういうものを乗り越

えていくことを通して、ほんとの意味での神様のつながりがわたしたちの中にも与えられるのではないかなと思います。

今日、「エッフアタ」——「開け」っていうイエス様のおっしゃった言葉がとても印象深かったので、そのままを福音書は引用しているのかもしれませんが——「開け」っておっしゃったイエス様の言葉がわたしたちの心の耳にも届いて、それぞれ一人ひとりが出会う人々、また体験する出来事を通して、耳を傾ける、心を開くことを通して神様のみことばが一人ひとりの中に力となってわたしたちを支え、また、互いの関係を良いものへと導いてくださいますように、神様の恵みに心を開く、その思いを新たにして、このごミサを通して一人ひとりの中にイエス様をお迎えしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>